

AICHI-NAGOYA



"Heart" of JAPAN
Technology & Tradition

百花城乱

お城観光ガイドブック

いづみ、
城愛の国
あいちへ

いづみ、
城愛の国
あいちへ

監修・文

中井均

加藤理文

文

小和田哲男

萩原さちこ
クリス・グレン

Contents

愛知のお城全域マップ	03
城のキホン用語集	05

美城に酔いしれる

名古屋城／クリス グレン	07
犬山城／萩原 さちこ	09

武将ゆかりの城をゆく

研究者の目線 小和田 哲男	11
織田信長ゆかりの城	12
徳川家康ゆかりの城	15

コラム 土の城の到達点古宮城と 石の城の始発点大給城 ／中井 均	17
---	----

あいち三大合戦ゆかりの城をゆく

研究者の目線 小和田 哲男	19
桶狭間の戦いをめぐる城	20
長篠・設楽原の戦いをめぐる城	23
小牧・長久手の戦いをめぐる城	25

コラム 東海道筋に並んだ 全国屈指の規模の近世城郭 ／加藤 理文	27
---	----

まだまだあるぞ 愛知の名城	29
---------------	----

思わず集めたいくなる「御城印」	33
監修者・執筆者紹介	34

監修

中世城郭監修：中井 均（滋賀県立大学名誉教授）
近世城郭監修：加藤 理文（日本城郭協会理事）

文

小和田 哲男（日本城郭協会理事長）
中井 均（滋賀県立大学名誉教授）
加藤 理文（日本城郭協会理事）
萩原 さちこ（城郭ライター）
クリス グレン（お城好きラジオDJ）

表紙立面図（上から）
「清洲城主閣／模擬天守立面図」（清須市提供）／岡崎城
復興天守立面図」（岡崎市提供）「名古屋城天守北側立面図」
（出典 名古屋城総合事務所蔵 昭和実測図）

愛知は、武将や合戦に関わる
戦国から近世にかけての
城の宝庫である。

かつての尾張・三河両国、すなわち現在の愛知県は、
織田信長・豊臣秀吉・徳川家康のいわゆる
「天下取りの三英傑」が生まれたところである。
この三武将によって、およそ百年にわたって
続けられた戦国争乱に終止符が
打たれることになったのは周知の通りである。
その愛知には、信長・秀吉・家康本人ゆかりの城だけでなく、
家臣たちの館や砦などを含め、かなりの数の城跡が
遺されている。これまで、城というと、どうしても、
天守や櫓、城門などの建造物が遺る近世の城に
人びとの関心が集まっていたが、
近年、堀や土塁、石垣しかない戦国の城が
注目されるようになってきたとの印象がある。

戦国の城から近世の城へ、城がどのように
発達してきたのか、その変遷の歴史を、
実際に訪ね、自分の目でたしかめることができるのも
愛知の城の魅力ではないかと考えている。

小和田 哲男
（日本城郭協会理事長）

尾張

- 1 名古屋城(名古屋市) 100名城 印 7
- 2 末森城(名古屋市) 印 12
- 3 大高城(名古屋市) 21
- 4 丸根砦・鷲津砦(名古屋市) 22
- 5 善照寺砦(名古屋市) 22
- 6 桶狭間古戦場公園(名古屋市) 22
- 7 那古野城(名古屋市) 29
- 8 龍泉寺城(名古屋市) 29
- 9 守山城(名古屋市) 29
- 10 黒田城(一宮市) 13
- 11 犬山城(犬山市) 100名城 印 9
- 12 楽田城(犬山市) 26
- 13 羽黒城(犬山市) 29
- 14 小牧山城(小牧市) 続100名城 印 14,25
- 15 勝幡城(稲沢市/愛西市) 印 12
- 16 岩倉城(岩倉市) 13
- 17 沓掛城(豊明市) 印 20
- 18 桶狭間古戦場伝説地(豊明市) 22
- 19 岩崎城(日進市) 印 26
- 20 清須城(清須市) 印 14
- 21 古戦場公園(長久手市) 26
- 22 大草城(長久手市) 29
- 23 小口城(大口町) 29
- 24 大野城(愛西市) 印 29
- 25 蟹江城(蟹江町) 印 30

知多

- 26 大野城(常滑市) 印 30
- 27 大草城(知多市) 印 30
- 28 坂部城(阿久比町) 印 30
- 29 緒川城(東浦町) 印 30

印：御城印(登城記念証含む)の
取り扱いがあります

西三河

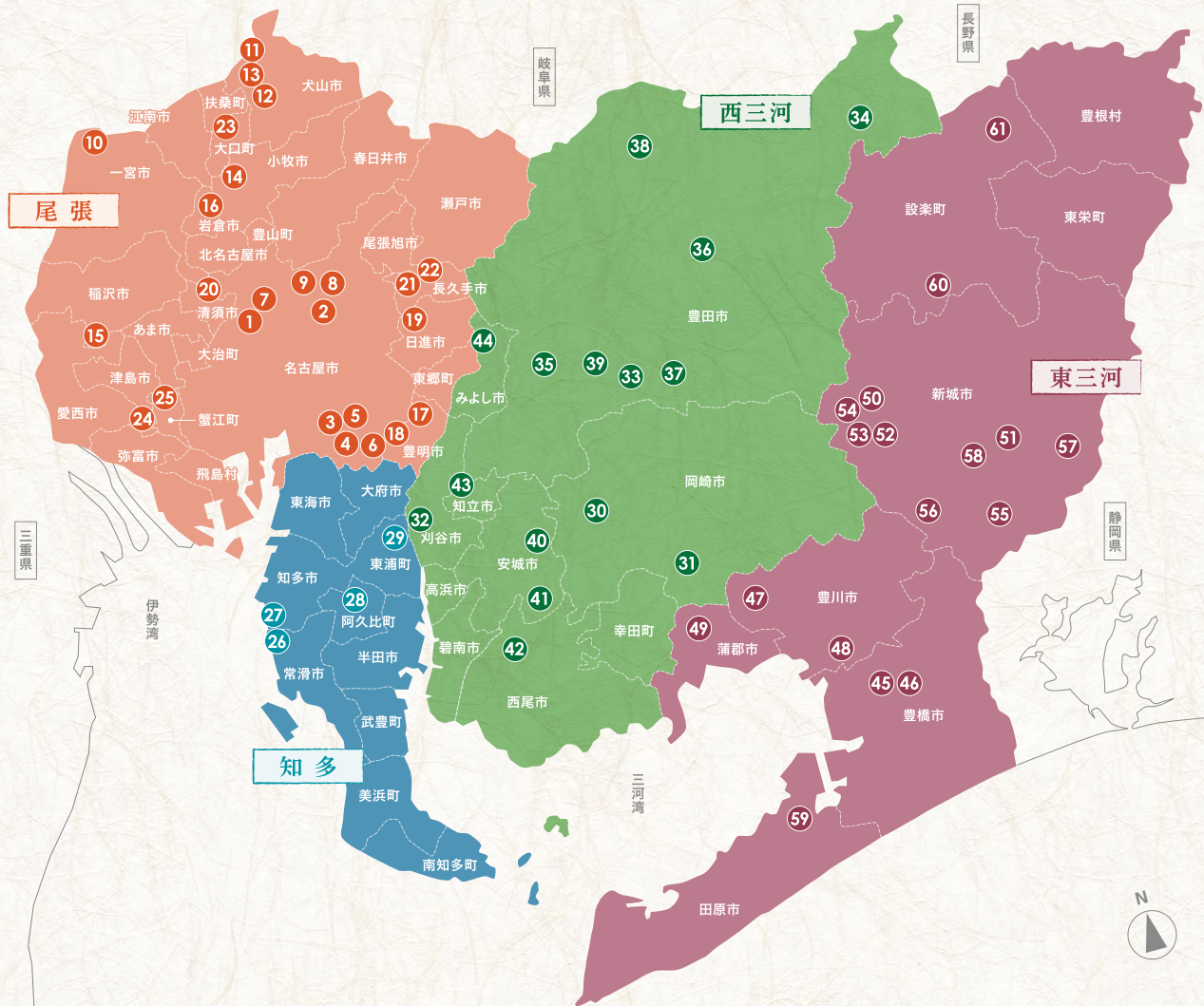
- 30 岡崎城(岡崎市) 100名城 印 16
- 31 山中城(岡崎市) 30
- 32 刈谷城(刈谷市) 30
- 33 大給城(豊田市) 18
- 34 武節城(豊田市) 印 24
- 35 拳母城(七州城)(豊田市) 30
- 36 真弓山城(足助城)(豊田市) 印 30
- 37 松平城(豊田市) 31
- 38 市場城(豊田市) 31
- 39 古瀬間城(豊田市) 31
- 40 安城城(安祥城)(安城市) 印 31
- 41 本證寺境内(安城市) 31
- 42 西尾城(西尾市) 印 15
- 43 知立城(知立市) 31
- 44 福谷城(みよし市) 31

東三河

- 45 吉田城(豊橋市) 続100名城 印 16
- 46 二連木城(豊橋市) 31
- 47 岩略寺城(豊川市) 31
- 48 伊奈城(豊川市) 32
- 49 上ノ郷城(蒲郡市) 印 32
- 50 古宮城(新城市) 続100名城 印 17
- 51 長篠城(新城市) 100名城 印 23
- 52 亀山城(新城市) 印 32
- 53 文殊山城(新城市) 32
- 54 塞之神城(新城市) 32
- 55 宇利城(新城市) 印 32
- 56 野田城(新城市) 印 32
- 57 柿本城(新城市) 32
- 58 設楽原古戦場跡(新城市) 24
- 59 田原城(田原市) 印 16
- 60 田峯城(設楽町) 印 24
- 61 津具城(設楽町) 印 32

愛知のお城 全域マップ

愛知は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康をはじめ個性豊かな武将たちを数多く輩出した
〈武将のふるさと〉であり、戦国時代には数多くの城が築かれた。
その数は戦国時代を中心におよそ2,000ヶ所以上ともいわれている*。
現在も名古屋城、犬山城、岡崎城などの近世城郭をはじめ、
数多くの中世の山城が山中に累々と残されている。



城の名称や曲輪等の名称は、管理している自治体ごとに「〇〇城」、「〇〇城跡」、「〇〇城址」や「二の丸」、「二ノ丸」、「二之丸」と
つけられていますが、この冊子では城の名前は「〇〇城」、曲輪の名称は「の」の字で表記を統一してあります。

*昭和63年から行われた文化庁の補助事業「愛知県中世城館調査報告書」では1,322ヶ所の中世城館が確認されている。

城めぐりが楽しくなる！

城のキホン用語集

城めぐりで出会う多彩な城用語の数々。
知っておくとより楽しめます。

中世城郭〈ちゅうせいこく〉

鎌倉・南北朝時代から室町・戦国時代につくられた土づくりの城。

近世城郭〈きんせいこく〉

一五七六年に織田信長が安土城を築城した以降から江戸時代にかけてつくられた城。天守や櫓などの瓦葺きの建物や高く積み重ねた石垣などの特徴を持つ石づくりの城。

山城〈やまじろ〉

山の頂部や中腹を中心に険しい地形を利用して築かれた城。

平山城〈ひらやまじろ〉

低い山や丘、その周辺の平地を利用して築かれた城。

平城〈ひらじろ〉

平地を利用して築かれた城。

縄張〈なわばり〉

曲輪、虎口、門、堀などの配置を決める設計プラン、レイアウトのこと。「縄張」という言葉は、縄を使ってプランを検討したことが由来とされる。

曲輪〈郭・くるわ〉

城に設けられた区画。城内の最も重要かつ、中心的な区画は「本曲輪」「主郭」「本丸」といった名称が用いられる。

虎口〈こぐち〉

城、曲輪の出入口。

土塁〈どるい〉

城や曲輪の防御のために、土を盛って造った土手。堀を掘った際に出た土を利用することも多い。



吉田城土塁

堀〈ほり〉

土を掘ってつくられた防御機能の一つ。高低差をつけることにより、敵の動きを阻む。水のない堀のことを空堀、水のある堀を水堀という。川を天然の堀として活用することもある。山の等高線に沿って掘られたものを横堀、等高線に對し直角に設け、斜面移動を防ぐものを豎堀という。

横堀



小牧山城

空堀



寄掛城

豎堀



市場城

水堀



名古屋城

堀切〈ほりきり〉

尾根をV字状に断ち切った空堀。尾根沿いに移動する敵を遮断することができる。

切岸〈きりぎし〉

曲輪の外側にある斜面を人工的に削ってつくった急勾配の崖。敵が簡単に曲輪に侵入できないようにするための工夫。

馬出〈うまだし〉

敵の侵入を防ぎ、出撃の拠点とする目的で虎口の外側に設けられた曲輪。半円形のを丸馬出、方形のを角馬出という。

枡形〈ますがた〉

門の防御を固めるために、内側や外側に設けた方形（四角形）の空いた空間のこと。



名古屋城 本丸大手口の枡形

総構〈惣構・そうがまえ〉

城と城下町を守るため、その外側を堀や土塁で囲んだ防御のこと。

野面積み〈のづらづみ〉

加工されていない自然石を使って積んだ古い時代の石垣。石と石の間に隙間が空くため、小さな石を詰める。



吉田城 鉄櫓下の石垣

算木積み〈さんぎづみ〉

石垣の隅石の積み方。長方形の石の長辺と短辺とを交互に積み上げることで、石垣の強度を高めた。一六〇〇年「関ヶ原の戦い」以降に完成。



名古屋城 天守台石垣

現存天守〈げんそんてんしゅ〉

江戸時代以前につくられ、現在も保存されている天守。日本



犬山城 天守の石落

全国に十二城しかない。犬山城はその一つ。

櫓〈やぐら〉

平時には主に武器庫として、戦時には敵の偵察や攻撃の拠点として使われた建物。

狭間〈さま〉

城内から敵を攻撃するために、建物や堀・石垣に設けられた四角形や円形の小窓のこと。縦長は、鉄砲・弓矢両用、四角・丸・三角は鉄砲用として使われた。

石落〈いしおとし〉

天守や櫓、土塀などの一部を石垣から張り出させた狭間のこと。その下部の穴から弓や鉄砲などで攻撃した。ここから石を落とすと言っているのは、江戸時代の軍学によって拡散された考えである。

破風〈はふ〉

切妻造や入母屋造の屋根の妻側に見られる端部のこと。破風には、入母屋破風、切妻破風、唐破風、千鳥破風などがある。



大手門〈おおももん〉

城の正面である大手にたつ門。城によっては、追手とする場合もある。

搦手門〈からめてもん〉

城の裏口にたつ門。

扇の勾配〈おうぎのこうばい〉

緩やかな曲線を描く反りから、上にいくに従って徐々に急勾配となり、最後は垂直に近い状態に積み上げられた石垣。築城の名手・加藤清正が得意とした。

望楼型天守〈ぼうろうがた〉

一階または二階建ての入母屋造の上に、望楼（物見）型の建物をのせた天守。古い時代の天守の形。



犬山城

層塔型天守〈そうとうがた〉

下から上にいくに従って規則的に小さくなる、塔のような形をした天守。一六〇〇年「関ヶ原の戦い」以降に登場した新しい時代の天守で、藤堂高虎が生み出した。工期が短く、費用も安くすんだ。



名古屋城

天下普請〈てんかぶしん〉

徳川幕府が、全国の諸大名を使って行った築城工事。「手伝い普請」・「割普請」ともいう。費用は、すべて大名持ちであった。

美城に
酔いしれる

国特別史跡

名古屋城

金鯢輝く、
東海道鎮護の巨城



データ提供：名古屋城総合事務所

名

古屋城は「関ヶ原の戦い」で勝利をおさめた徳川家康が、大坂に残る豊臣家に対する備えのために築いた城である。徳川と豊臣の決戦「大坂冬の陣・夏の陣」の際、徳川軍はここ名古屋城から出陣した。

加藤清正、黒田長政、池田輝政など、歴史に詳しくない人でも一度は耳にしたことがある武将たちが、この城の築城に携わっている。中でも特に注目されるのは清正だ。城内には銅像のほか「清正石」という名の巨石もあり「名古屋城は清正の城だ。」と誤解している人さえいるほどである。しかし実際に清正が携わったのは大、小の天守台だ。清正は、それをわずか三ヶ月で築いた。この事実を知れば、見方も変わるだろう。

名古屋城は、延べ床面積日本一を誇る天守とそこに輝く「金のしゃちほこ」にばかり注目が集まるが、昭和二十年（一九四五）の戦火を逃れ現存する三基の櫓にもぜひ注目したい。その規模は他の城の天守にも匹敵するほどであり、内部に入れば四百年の歴史を体感することができる。シンプルかつ堅固な縄張を意識しながら城内を歩く、史実に忠実に復元された本丸御殿をまるで美術

館を愉しむように味わうなどすれば、さらにこの城は楽しくなる。

近世城郭の最高峰と称される名古屋城はまさに、城の歴史の集大成が見られる城郭だ。愛知・名古屋に住む者として、家康が築いたこの城を誇りに思う。

（文・写真 クリスグレン）

- ① 本丸東二之門の正面にある清正石。重さ推定10トンとされるこの石を清正が運んだという伝承があるが、実際にこのエリアを担当したのは黒田長政だった。
- ② 徳川家康の命により名古屋城の築城には20名の大名が携わった。城内の石垣には、その証ともいえる多様な刻印が見られる。
- ③ 清正が得意とした「扇の勾配」と呼ばれる天守台。東北隅北面には「加藤肥後守内小代下総」と書かれた刻印がある。
- ④ 江戸時代から現存する三階櫓の中では、全国で2番目の大きさを誇る西北隅櫓（重要文化財）。櫓を囲む幅広の水堀も見どころの一つ。
- ⑤ 方形のシンプルな縄張、各曲輪を囲む堀などがよくわかる。〈元禄拾年御城絵図（名古屋市蓬左文庫提供）〉
- ⑥ 江戸時代の図面や昭和前期に作成された実測図、最後の尾張藩主・徳川慶勝が撮影した古写真などの史料を使って復元された本丸御殿の表書院・上段之間。〈データ提供：名古屋城総合事務所〉

名古屋城

別名

蓬左城（ほうさじょう）など

築城年代／築城主

慶長15年（1610）／徳川家康

所在地

名古屋市中区本丸1-1

文化財史跡区分

国特別史跡

アクセス

地下鉄名城線「名古屋城」駅下車
7番出口より徒歩5分

入場料

大人500円 中学生以下無料

※その他料金設定あり

電話番号

052-231-1700

営業時間

9:00～16:30

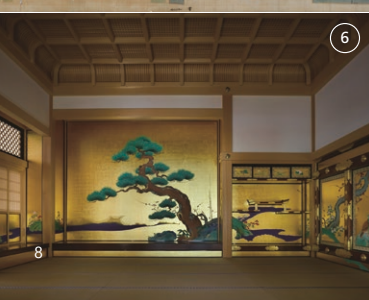
※本丸御殿・西の丸御蔵城宝館への
入場は16:00まで

休館日

12月29日～1月1日

※催事等により変更と
なる場合があります。

公式HP▼





①



②



③



④



⑤



⑥

- ① 木曾川の対岸から。犬山城は断崖の最高所に本丸を置き、曲輪が階段状に並ぶ構造。天守は本丸の最奥に建ち、搦手(裏手)が木曾川に続く。
- ② 犬山橋からの夕景。西向きのため、夕景ならベスト撮影スポット。別名の白帝城は、長江を臨む風光明媚な白帝城を荻生徂徠が連想して命名した。
- ③ 天守は三重四階地下二階の望楼型。木材をそのまま見せる真壁造で、古式の美が光る。
- ④ 最上階には廻縁と高欄がめぐる。廻縁は木造で腐朽しやすいため装飾として取りつけられることも多く、実際に歩ける天守は希少。
- ⑤ 唐破風の屋根の上にある、亀の甲羅に桃が乗った魔除けの瓦。
- ⑥ 犬山の夏の風物詩・木曾川の鵜飼を楽しめる「木曾川うかい」の観覧船から見上げるのもおすすめ。迫力満点で、天守がより勇壮に見える。

犬山城

別名

白帝城(はくていじょう)

築城年代

天文6年(1537)

築城主

織田信康

所在地

犬山市犬山北古券65-2

文化財史跡区分

国宝(天守)、国指定史跡

アクセス

名鉄犬山線「犬山遊園」駅から
徒歩15分

名鉄犬山線「犬山」駅から
徒歩18分

入場料

大人550円 小中学生110円

電話番号

0568-61-1711

営業時間

9:00~17:00

※入場は16:30まで

休館日

12月29日~31日

公式HP▼



十二の天守のうち、廻縁を実際に歩けるのは犬山城と高知城だけです。廻縁からは、三六〇度の犬山パノラマが広がります。木曾川を見下ろせば、濃尾平野の見事な展望、天気がよければ岐阜城や名古屋市内街地まで一望。通り抜ける風が心地よく、時間を忘れます。(文・写真 萩原さちこ)

最大の魅力は、天守最上階の壁面の外側をめぐる「廻縁」を一周できること。全国に江戸時代から残る十二の天守のうち、廻縁を実際に歩けるのは犬山城と高知城だけです。廻縁からは、三六〇度の犬山パノラマが広がります。木曾川を見下ろせば、濃尾平野の見事な展望、天気がよければ岐阜城や名古屋市内街地まで一望。通り抜ける風が心地よく、時間を忘れます。(文・写真 萩原さちこ)

犬山城は尾張(愛知県)と美濃(岐阜県)の国境にあり、木曾川の対岸は美濃です。天守最上階から周囲を見渡せば、濃尾国境を制した気分になれるはず。天文六年(一五三七)に織田信長の叔父・織田信康が築城し、中山道と木曾街道に通じることから交易・政治・経済の要衝として繁栄。国境ゆえ幾多の激戦が展開され、羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康が戦った小牧・長久手の戦いの舞台にもなりました。天守は小ぶりながら、独特の意匠に溢れ情緒的です。扉を上から吊るす「突上戸」や格調高い「唐破風」などが、古式の美と格調を高めています。鐘型の華頭窓が窓枠を象っただけのも、工夫のひとつでしょう。

木 曾川の南岸、標高約八十五メートルの断崖上に建つ犬山城の天守。全国に五つしかない、国宝天守のひとつです。天守台を含めても約二十四メートルと高くはありませんが、凛と立つ姿は勇ましく、木曾川を背にした「後堅固」の城の威容が感じられます。

美城に
酔いしれる

国宝・国指定史跡

犬山城

木曾川を臨む景勝の地に
築かれた「後堅固」の城

データ提供(社)犬山市観光協会

武将ゆかりの 城をゆく

室町時代、尾張の守護は斯波氏^{しば}で、その守護代が織田氏だった。織田氏は、岩倉織田氏と清須織田氏に分かれ、清須織田氏の「三家老」の一人だったのが織田信秀である。信秀は津島湊を押さえ、その経済力をバックに急成長を遂げ、尾張中原に打って出て、その跡を継いだ信長によって尾張は統一され、領国を美濃に広げ、さらに「天下布武」をスローガンに掲げて大勢力となっていた。

一方、三河で頭角を現したのが徳川家康である。岡崎城主松平広忠の子として生まれた家康は、駿河の今川義元の人質となり、その家臣としての扱いを受けていたが、永禄三年（一五六〇）五月十九日の桶狭間の戦いを機に独立を果たしていった。その過程を、城を通して追うことができる。

文 小和田哲男

織田信長

〈父信秀〉ゆかりの城

織田信長は領国拡大とともに次々と居城を移したが、目的によって居城を移転させる手法は父信秀の時代から行われていた。信秀は、その父信定（信長祖父）が築いた勝幡城を拠点に勢力を伸ばし、天文七年（一五三八）、那古野今川氏の居城の那古野城を攻略。これを嫡男信長に与え、自らは熱田湊に近く当時交通の要衝であった古渡^{ふるわたり}の地に城を築き居城とした（古渡城）。信秀は尾張下四郡を支配した清須織田家の一族で、奉行の家柄だったが、熱田や津島の湊を掌握し主家をのいでいた。さらに天文十七年（一五四八）には今川氏との戦いに備え末森城を築き居城とした。



※上記海岸線・河川の形状は細部を省略したイメージです。

織田信秀 居城の移転



推定復元模型

所 稲沢市平和町之内地内
☎ 0587-22-1414（稲沢市観光協会）



勝幡城

稲沢市・愛西市

信秀・信長親子、生誕の城

二重の堀で囲まれた館城であり、複数の川を外堀として利用していた。信秀からの招待で城を訪れた公卿・山科言繼^{とよつぐ}が書いた「言繼卿記」には、その規模と出来栄に驚いたと記されており、当時の織田氏の力をうかがい知ることができる。江戸時代の河川工事により遺構が失われているため、かつての城の姿は、名鉄「勝幡駅」北口にある推定復元模型を参考にすると良いだろう。

末森城

名古屋市中

信長の弟・信勝（信行）が父・信秀から受け継いだ城

三河への侵攻を進める今川義元、美濃の斎藤道三と争っていた信秀だったが、道三とは同盟を結び、対今川への備えとして古渡城から末森城に拠点を移した。信長と道三の娘・濃姫（帰蝶）との婚姻もこの頃だ。その三年後、信秀は突如病にかかり、この城で死去した。標高四十四メートルの平山城には、曲輪、深さ七、八メートルほどの空堀や切岸が残る。名古屋の市街地に中世の城跡がこれほど良好に残るのは貴重であり、奇跡といっても過言ではない。



所 名古屋市中
千種区城山町
2-88
☎ 052-751-0788
（城山八幡宮）
🕒 5:30（開門）
～20:00（閉門）

織田信長像
制作／杉浦藤太郎（清須市）

徳川家康公像
制作／神戸峰男（岡崎市）

〈尾張統一戦〉ゆかりの城

父信秀亡き後、織田弾正忠家の家督を継いだ信長は、今川義元による東方からの圧迫に加え、弟信勝（信行）を擁立する反信長派や守護代・清須織田家、岩倉織田家との間で尾張の覇権を争った。弘治元年（一五五五）に、叔父織田信光の協力を得て清須城に入城。弘治三年（一五五七）には弟信勝を殺害、翌々年には岩倉織田家の岩倉城を攻め落とした。桶狭間の戦いの後、小牧山に城を築き居城を移し、永禄八年（一五六五）には美濃斎藤氏と組んで反抗した従兄弟織田信清の犬山城を落城させ尾張統一を果たした。

※信長の清須城入城には天文二十三年（一五五四）説、信勝殺害には永禄元年（一五五八）説、岩倉城攻めには永禄元年（一五五八）説がある。



※上記海岸線・河川の形状は細部を省略したイメージです。

- 信長軍の攻撃
- 信長の本拠地の移動
- 反信長軍と今川氏の攻撃
- 今川氏の勢力範囲
- 斎藤氏の防御ライン

清須城

清須市

※清須は清洲とも書かれたが、中世の史料で清須と記述されたので清須城と表記。ただし、明治二十二年の町政施行で清洲町が誕生し平成十七年に清須市が誕生するまでに整備された清洲城主閣や公園には旧町名の「清洲」が冠されている。

尾張の中心にあった信長の城

一五五五年、那古野城から清須へ居城を移した信長は、この城から「桶狭間の戦い」へ出陣した。現在は模擬天守がたつが、信長時代の清須城に天守はなく、二重の堀に囲まれた敷地には居館や御殿などがあつたとされる。「本能寺の変」後、信長の子・信雄が城主となり、天守を持つ総石垣づくりの城へと改修した。信雄時代の天守は、清洲古城跡公園近くにあつたと推定されている。清洲公園には信長と濃姫（帰蝶）の銅像がたつ。どちらの公園もかつての城内であつた点を意識して周辺を散策したい。



移築復元された石垣



織田信長像

清洲公園



清洲城主閣（模擬天守）

春日井郡清須古城絵図（名古屋市蓬左文庫蔵）

所 清須市朝日城屋敷1-1
 ¥ 大人400円 小人200円
 ☎ 052-409-7330
 営 9:00～16:30
 休 月曜日・年末（12月29日～31日）
 月曜日が祝日・振替
 休日の場合は翌平日

公式HP ▶



推定イメージ図



小牧山歴史館 遠望



信長時代の石垣



れきしるこまき

所 小牧市堀の内一丁目地内
 ☎ 0568-72-0712（小牧山歴史館）
 0568-48-4646（れきしるこまき）

公式HP ▶

小牧山城

小牧市

革命児・信長が自ら築いた初めての城

「桶狭間の戦い」に勝利し尾張統一を果たした信長は、美濃攻略を目論み、その拠点として、広大な濃尾平野の北東部に位置する小牧山に城を築いた。山麓の曲輪には信長の屋敷、その周りには重臣の屋敷があつたとされ、城の南側には城下町が整備された。また近年の発掘調査により、山頂には三段の石垣が巡っていたことがわかっていて、この石垣を採用した革新的な城づくりは近世城郭の原点とも言われ、のちに

信長が築く安土城へ引き継がれていく。城は築城から四年後、信長が岐阜に城を移したことにより廃城となった。近年の発掘調査では新たな事実が続々と見つかつており、小牧山城における信長の革新的な築城技術が注目を集めている。山頂には天守を模した展示施設「小牧山歴史館」があり、麓には小牧山城に関する歴史や発掘調査の成果を知ることができる「れきしるこまき」がある。

岩倉城

岩倉市

信長、岩倉城を落とす尾張統一へ

信長は尾張北部を統治していた岩倉城主・織田信安・信賢と争っていたが、一五五九年に岩倉城を落とし尾張をほぼ統一した。かつての城は二重堀で囲まれ、館と望楼があつたとされる。



岩倉城跡

所 岩倉市下本町城址121
 ☎ 0587-38-5819（岩倉市生涯学習課）

黒田城

一宮市

信長と対立した岩倉織田家の城

尾張北部を統治していた岩倉織田家の家老・山内盛豊（戦国武将・山内一豊の父）が城代をつとめたことで知られる。一五五七年、対立する信長によって攻め落とされた。



所 一宮市木曾川町黒田字古城
 ☎ 0586-46-3215（一宮市博物館）

〈三河統一戦〉ゆかりの城

松平元康（後の徳川家康）は、桶狭間の戦いの敗戦による今川軍の撤退によってようやく父祖伝来の岡崎城に入城した。その後、叔父の緒川城主水野信元の働きかけにより織田信長と和睦し今川家と断交。西三河の今川方の東条城や上ノ郷城を攻略し、永禄六年（一五六三）には今川義元の編諱を受けて名乗った「元康」の諱を家康に改めた。家康は同年勃発した三河一向一揆を平定後、永禄七年（一五六四）春から東三河に侵攻。今川方の拠点、吉田城、田原城を攻略し、三河統一を成し遂げた。永禄九年（一五六六）の末には姓を徳川に改めた。



※上記海岸線・河川の形状は細部を省略したイメージです。

← 家康軍の攻撃

- 1 永禄3年(1560) 5月
桶狭間の戦い後、岡崎城に帰還
- 2 永禄4年(1561) 2月
この頃、織田信長と和睦し、互いに領国範囲を承認
- 3 永禄4年(1561) 9月
今川方の西条城(西尾城)、東条城を攻略し、西三河を平定

- 4 永禄5年(1562) 2月
今川方の鵜殿長照の上ノ郷城を攻略し、長照の子を人質にする。今川家の人質になっていた正妻築山殿、長子竹千代と人質交換し、奪い返す。

- 5 永禄6年(1563) 秋
この頃、三河一向一揆が勃発(翌年3月に一向一揆を平定)
- 6 永禄8年(1565) 3月
今川家の東三河の拠点吉田城、田原城を攻略。今川方勢力を一掃し、三河を統一する。



所 西尾市錦城町231-1 ☎0563-54-6758(旧近衛邸)

西尾城 西尾市

徳川の譜代大名が代々城主をつとめた城

「桶狭間の戦い」後、今川の人質だった家康は解放され、家臣・酒井正親に今川の支配下にあった西尾城を攻略させ、城主とした。一五八五年には家康の命で、正親の子・重忠が大改修を行った。城跡には鎌石門、本丸・二の丸の丑寅櫓、天守台、屏風折れの土堀が復元されるなど着実に整備が進んでいる。屏風折れ土堀の復元は西尾城と宇都宮城(栃木県)にしかなく、貴重である。

岡崎城 岡崎市

太平の世を築いた徳川家康生誕の城

十五世紀中頃、西郷頼嗣が砦を築いたのがはじまり。一五三二年、家康の祖父・松平清康が現在の地に城を移した。この城で生まれた家康は六歳で人質となった後、十九歳でふるさと岡崎へと戻り城主となっている。家康が將軍となって以降は、家格の高い譜代大名たちが城主となっており、家康生誕の城の城主となることを大名たちは誇りとしたと伝

わる。

東西約一五キロメートル、南北約一キロメートルにも及ぶ総構えを持ち、東海道を引き入れた巨大な城郭である。一五九〇年には、豊臣大名の田中吉政が天守を築くなど大規模な改修を行った。曲輪、堀、土塁、石垣など見応えのある遺構が多く残る。中世と近世の城の遺構を見極めながら歩くことをおすすめしたい。



所 岡崎市康生町561-1
＼ 大人(中学生以上)300円
小人(5才以上)150円
☎0564-22-2122
(岡崎城)
営 9:00~17:00
休 12月29日~31日

公式HP▶



吉田城 豊橋市
家康の本城・岡崎城に次ぐ広大な城
一五〇五年、築城。一五六五年には家康が吉田城を攻め落とし、徳川四天王・酒井忠次をここに置いた。一五九〇年に家康が関東へ移ると池田輝政が入城。吉田城の拡張と城下町の整備をおこなった。本丸に復元された鉄櫓下の石垣は輝政時代のもの。城跡には曲輪、堀、土塁、石垣などがよく残る。本丸周辺の石垣に刻印が見られる点も興味深い。



鉄櫓

所 豊橋市今橋町3
☎0532-51-2430(豊橋市観光プロモーション課)
〈古城鉄櫓〉
営 火曜から日曜日の10:00~15:00
休 月曜日(祝日の場合は開館)、年末年始
12月29日~1月3日 ※外部見学は随時可能



鉄櫓下石垣

田原城 田原市

家康が今川氏から奪取した三河支配の拠点

一四八〇年、この地で強力な力を持っていた戸田氏が築城。一五四七年に今川義元が攻め落とし、以降は今川氏が支配した。「桶狭間の戦い」で義元が討死すると、家康は三河平定を進め、一五六五年には田原城の攻略に成功した。かつての大手門である桜門や二の丸櫓が復元されている。土塁、空堀、石垣、水堀などが残る。

所 田原市田原町巴江11-1(田原市博物館)
☎0531-22-1720

土の城の到達点古宮城と 石の城の始発点大給城

文・写真 中井 均（滋賀県立大学名誉教授）

新城市の作手高原には古宮城、亀山城、文殊山城、塞之神城、川尻城、石橋城などの城跡が集中して分布している。なかでも古宮城は近年中世山城の聖地として注目される城跡である。

平野にぽつんと位置する小丘陵をまるごと城として築いている。城の構造は巨大な堀切で小丘陵を二分し、東側に土塁を巡らせた主郭を配置している。その虎口は両袖に土塁を設ける枡形となっている。西側には丸い曲輪が伴う。この曲輪の周囲にも土塁が巡るとともに横堀が巡らされており、丸馬出として構えられたことがわかる。

さらに山麓に至るまで土塁を巡らせた曲輪が複雑に構えられており、山麓を全周する横堀も巡らされている。

こうした高度に発達した縄張りには戦国時代後半の築城を示している。唯一の史料として元龜四年（一五七三）に武田信玄が長篠陣中に作手で普請をしたと「当代記」に記されており、それ

が古宮城ではないかと考えられている。

幸か不幸か古宮城に関する史料はこれしか残されていない。そのため縄張りと呼ばれる城の構造からの分析が重要となる。古宮城はこれだけの特徴を有するだけに推理するにはもってこいの城である。

丸馬出を備えた縄張りは典型的な武田氏の築城技術で、元龜四年の武田信玄による作手普請こそが古宮城であるとされた。

ところが丸馬出を構える武田氏の城では山城全域を取り囲むような山麓の横堀は認められない。古宮城の大きな特徴であり、その評価を考えなくてはならない。さらに近年では丸馬出も武田氏だけではなく、徳川家康も用いていたことが明らかとなっている。

古宮城の築城は信玄によるものであることは否定できないが、横堀の存在から天正三年（一五七五）に武田氏が作手より撤退した後に境目守備のため徳川家康によって改修された可

能性が高い。このように古宮城の築城についての謎は解き明かされていない。縄張りからの推理はまだまだ続きそうである。

古宮城が土の城の到達点を示すのであれば、豊田市の市場城や大給城などでは石垣を用いた城が構えられている。なかでも大給城は岩盤を巧みに利用して曲輪を配置しており、虎口部分は石垣によって築かれている。圧巻は北側の谷筋に構えられた水の手と呼ばれる谷を堰き止めた石垣である。高さは五メートルを超える高石垣で、自然石を積み上げた野面積みによって築かれている。

従来大給城は長坂新左衛門の城を松平信光が攻略し、三男親忠に与え、さらに親忠は次男の乗元に譲ったと言われている。乗元は大給松平氏の祖となり、以後大給松平氏の居城となる。しかし大給松平氏時代の山城は山を切り盛りして築く土造りの城の時代である。ところが現存

する大給城には石垣が用いられている。どうも現存する大給城の構築は松平氏時代ではなさそうである。周辺で石垣による改修が考えられるのは天正十二年（一五八四）の羽柴秀吉が徳川家康・織田信雄の小牧長久手合戦である。長期の対峙戦となった合戦に乗じて家康が石垣造りの城に改修したのではないだろうか。

市場城は足助鈴木氏の一族、鱸氏の居城と言われているが、こ

でも石垣が多用されており、やはり天正後半に家康によって改修されたと見られる。

このように大給城や市場城も石垣の存在より知られざる歴史が秘められているようである。愛知県内には「三三三ヶ所」の城跡が確認されている。その大半は戦国時代の城である。山城では曲輪、堀切、土塁などの遺構が山の中に残されている。藪漕ぎをしながら山城を築いた戦国人の知恵と工夫を探る城歩きはやめられない。

Data

古宮城

所 新城市作手清岳寺宮山内
☎ 0536-37-2188（作手歴史民俗資料館）

市場城（→P31）

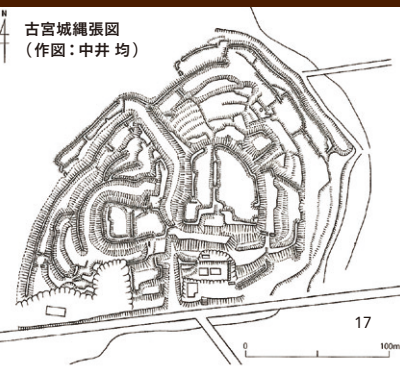
☎ 0565-65-3808（豊田市小原観光協会）

大給城

所 豊田市大内町
☎ 0565-77-8089（松平観光協会）



市場城 石垣



古宮城縄張り図
（作図：中井 均）

古宮城 虎口（両袖型枡形虎口）写真提供：新城市

あいち三大合戦 ゆかりの城をゆく

「戦国十大合戦」といういい方がある。戦国時代のわが国の合戦の中で重要度の高い十の合戦であるが、その中に愛知で繰り広げられた三つの合戦が含まれている。永禄三年（一五六〇）の桶狭間の戦い、天正三年（一五七五）の長篠・設楽原の戦い、そして同十二年（一五八四）の小牧・長久手の戦いである。

桶狭間の戦いは、織田信長が十倍以上の軍勢を擁した今川義元を破った戦いで、この戦いに勝ったことで、その後の信長の飛躍につながったことで知られている。長篠・設楽原の戦いは、「戦国最強」などといわれた武田軍を信長・家康連合軍が破った戦いで、小牧・長久手の戦いは、家康と織田信雄が秀吉に挑んだ戦いである。この三つの戦いの舞台となった城も遺っており、訪ねたい場所である。

文 小和田哲男

あいち三大合戦 1

〈桶狭間の戦い〉をめぐる城 壱

桶狭間の戦いをさかのぼること二十年。尾張の織田氏と駿河の今川氏の熾烈な抗争は信長の父・信秀の時代にはじまっていた。以後、信秀・信長と義元は安城城の争奪戦や村木砦の戦いをはじめ三河・尾張の国境付近で衝突を繰り返していた。やがて甲斐の武田氏、関東の北条氏と同盟を結んだ今川義元は、後顧の憂いなく、本格的に織田領へ侵攻を図る。永禄三年（一五六〇）五月、義元は満を持して二万五千の大軍を率いて尾張に向かった。



※上記海岸線・河川の形状は細部を省略したイメージです。

← 今川義元の進軍ルート 今川領 織田領

永禄3年（1560）5月12日、今川義元は25,000人の大軍を率いて駿府今川館を出陣、尾張進撃を開始した。18日には沓掛城に着陣。軍議で翌19日の織田方の丸根砦、鷺津砦攻略を決した。義元の尾張侵攻理由はかつては上洛途上の作戦の一環とされていたが今日これは否定されている。現在は、今川領最前線の鳴海城・大高城への後詰*（ごづめ）説、尾張今川領の回復説や尾張奪取説が唱えられている。

※今川軍25,000人の数には諸説あり。

*後詰＝敵に包囲された味方の城を救うため出兵すること。



愛知郡沓掛村古城絵図（名古屋市蓬左文庫蔵）

所 豊明市沓掛町東本郷11
☎ 0562-92-8317（豊明市生涯学習課）



沓掛城

豊明市

合戦前夜、今川義元が最後の一夜を過ごした城

今川の城である鳴海城と大高城の周囲には、織田方の砦が築かれた。義元は両城が危機的状況に陥っていることを知り、その救援に向かうべく駿府を出陣する。「信長公記」によれば、義元は合戦二日前に沓掛城へ入城したようだ。そして合戦当日の朝、午前八時頃、本陣となる「おけはざま山」を目指し出発した。まさかこの時、自身最期の日になるとは予想もしていなかったであろう。

城跡には本丸・二の丸、諏訪曲輪のほか空堀や土塁が残る。特に本丸を囲む空堀と土塁の遺構が素晴らしい。

若かりし家康が
兵糧を運んだことでも知られる城

城の二の丸からは、丸根砦と鷺津砦が見える。信長は、対今川の最前線に両砦を築くことで兵糧攻めを計画したとされる。城から砦までの距離は約八百メートル。実際、目の当たりにすると、その近さに驚く。今川軍の危機を救ったのは、当時まだ今川家の人質だった松平元康（徳川家康）だ。合戦前夜に兵糧を大高城へ運び、翌朝には丸根砦を落とした。しかし、義元は桶狭間で討死。今川軍は敗北した。

城跡は公園として整備されており、見やすい。本丸の北斜面は高さ約八メートルの切岸となっているほか、二の丸と三の丸の間には横堀があり、幅、深さ共に十分で見応えがある。



善照寺ぜんしょうじ
名古屋市

鳴海城のおさえとして
築かれた織田軍の砦

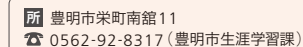
この砦は、今川方の鳴海城の東百メートルにあり、丹下砦、中島砦と共に信長によつて築かれたものである。合戦当日の早朝、清須を出発した信長は熱田神宮を経

らに南の中島砦へ向かったとされる。現在は砦公園として整備されており、高台からは沓掛城方面や今川軍が布陣した高根山方面を望むことができる。



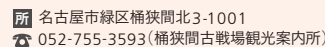
豐明市

今川義元をはじめ今川軍七人が



名古屋市

合戦に勝利した織田信長と敗れ



〈長篠・設楽原の戦い〉をめぐる城

長篠・設楽原の戦いは、天正三年（二五七五）、武田方と徳川方が争奪を繰り返した境目（*）に位置した長篠城をめぐるおきた。父信玄と同じく三河へ度々侵攻し、徳川家康との決戦を望んだ武田勝頼は、徳川方に寝返った奥平貞昌（信昌）が守備する長篠城を取り囲んだ。家康は、信長に救援を求め、信長・家康連合軍は落城寸前の長篠城へ後詰（ごせつ）に向かい、設楽原で武田軍と激突した。

*境目＝領地と領地の境界のこと。戦国時代は境目地域に位置した国衆（国人領主）の帰属や存立確保をめぐる戦いが繰り返された。



長篠・設楽原の戦いは織田信長・徳川家康連合軍の「鉄砲三千挺三段撃ち」の戦術が有名だが（鉄砲数は諸説ある。三段撃ちは江戸時代の軍記物の記述）、対する武田勝頼も決して鉄砲を軽視していたわけではない。しかし交易都市・堺と物流ルートを掌握していた信長はその経済力を背景に、鉄砲、弾丸、硝石（火薬の原料）といった物量面で武田軍を圧倒していた。武田軍は幾たびか攻撃を繰り返したが、鉄砲、馬防柵に阻まれ、その過程で名のある武将を失った。

長篠合戦図屏風
徳川美術館蔵（徳川美術館イメージ・カブ/DNPartcom）

長篠城 新城市

二つの川が合流する切り立った崖の上にたつ堅固な城

一五〇八年、築城。二五七五年には徳川方の奥平貞昌（信昌）が城主となる。「長篠の戦い」のとき、城内にいた兵はわずかに五百。対する武田は二万五千で城を包囲したが、城を脱出し援軍を要請した足軽・鳥居強右衛門の活躍もあり、織田・徳川の援軍到着まで見事に耐え抜いた。

城の南にある牛淵橋から見ると、自然の地形をうまく利用した城だといふことがよくわかる。本丸には見事な堀と土塁が残り、見応えがある。かつての二の丸には長篠城址史跡保存館がたち、合戦の様子を伝える。



所 新城市長篠字市場22-1
¥ 一般220円 小中学生100円
☎ 0536-32-0162（長篠城址史跡保存館）
営 9:00～17:00
休 毎週火曜日
（火曜日が休日の場合は次の平日が休館日）
年未年始（12月29日～1月3日）



田峯城 設楽町

武節城 豊田市

中世城郭を参考に復元された奥三河の代表的な山城

一五八一年、徳川家康より所領を拝領し菅沼定忠が城主となるが、一五七一年には家康を裏切り武田家に仕えた。「設楽原の決戦」で敗北が決定的となった武田勝頼は、定忠とともに本陣から約二十キロメートル離れた田峯城へと向かうが、留守を守っていた定忠の叔父・定直らが織田・徳川の報復を恐れ入城を拒否。一年後、定忠は雪辱を果たすべく城を攻め落とした。近くには、このとき亡くなった人々を弔う首塚が残る。

田峯城の支城として築城。敗走した勝頼が田峯城で入城を拒否されたため、約三十キロメートルのこの城まで落ち延び、一夜を過ごしたことも知られる。城の留守を守っていた者たちが、疲れ切った勝頼を梅酢湯でもてなしたという伝承も興味深い。

城の北には武田軍が通ったとされる道のほか、城下には城のなごりを感じさせる地名が残る。曲輪、土塁、堀、堀切、切岸、狼煙台などの遺構も残る。



所 北設楽郡設楽町田峯字城9
¥ 大人220円 小中学生110円
☎ 0536-64-5505（田峯城）
営 9:00～16:00
休 月曜日・祝日の翌日
12月29日～1月3日



所 豊田市武節町シロ山194
☎ 0565-83-3200（いなぶ観光協会 道の駅観光案内所）



馬防柵（復元）



所 新城市竹広字
信玄原552
☎ 0536-22-0673
（新城市設楽原
歴史資料館）



設楽原古戦場跡 新城市

大量の火縄銃が使われた日本初の戦い、最終決戦の地

騎馬戦を得意とする武田軍と新たな武器である火縄銃を巧みに使い勝利した織田・徳川連合軍。約百メートルにわたり再現された馬防柵越しに勝頼の本陣を望み、火縄銃での三段撃ちに向かってくる武田軍を想像しながらこの地に立てば、この戦いへの理解がさらに深まる。質量共に日本最大級を誇る火縄銃等を展示する設楽原歴史資料館へもぜひ訪れたい。当地で開催される「決戦場まつり」で披露される鉄砲隊による本格的な演武も必見。

〈小牧・長久手の戦い〉をめぐる城

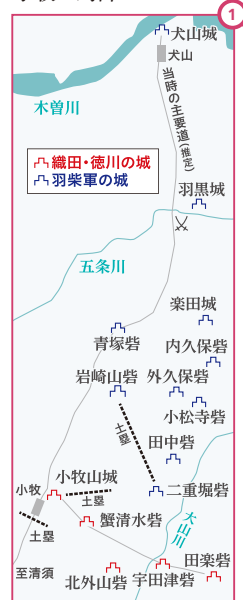
織田信長亡き後の天下の覇権をめぐり、天正十二年（一五八四）、羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康連合軍が争った小牧・長久手の戦いは、尾張・美濃・伊勢を舞台に約八ヶ月に及んだ。この戦いは、両軍とも戦況の変化に応じて各地に城や砦を築いたり、古城を改修して合戦が繰り広げられた。天正十二年十一月、秀吉と信雄が単独講和した後も、家康は秀吉と対峙し、三河各地の城の防衛強化を図ったとされる。



※上記海岸線・河川の形状は細部を省略したイメージです（中世の木曾川は幾筋も流れがあり、分流しながら長良川流路に入っていた）。

小牧・長久手の戦いは、「小牧」と「長久手」での戦いだけではなく、蟹江城、大野城をめぐる蟹江合戦の他、尾張北西部の木曾川筋、伊勢方面でも城をめぐる戦いが各地で起きた。

小牧の対陣



小牧山城

信長の城を大改修した家康の本陣

家康は神原康政に命じて小牧山に曲輪・土塁・空堀・虎口を配し、秀吉軍に備えた。信長時代の城を利用したとは言え、その改修がわずか五日で行われたとされる点も興味深い。「小牧・長久手の戦い」で、小牧山城が戦場となることはなく、また江戸時代には家康ゆかりの陣跡として尾張藩によって保護され一般の立ち入りが禁止されたこともあり、遺構がよく残る。



所 小牧市堀の内一丁目地内
小牧山歴史館
0568-72-0712
0568-48-4646
(れきしるこまき)

楽田城

犬山市

家康と対峙する秀吉の本陣

十六世紀前半、尾張守護代・織田久長によって築城されたとされる。この城の北には秀吉軍の羽黒城と池田恒興が奇襲をかけ占拠した犬山城があるほか、複数の砦が築かれた。南には家康の本陣・小牧山城がある。城は「小牧・長久手の戦い」の講和条件として取り壊され、廃城となった。
城跡は現在、小学校となっており、残念ながら遺構は残らないが周囲には堀の名残と思われるような道も見られる。
※城跡については小学校敷地内なので一般は入れません。



丹羽郡楽田村古城之図
(名古屋蓬左文庫蔵)

所 犬山市字城山97付近

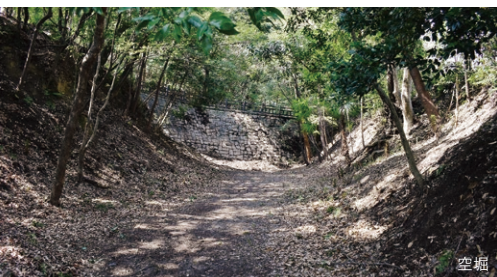
岩崎城

日進市

戦況に大きな影響を与えた「岩崎城の戦い」決戦の城

両軍の膠着状態が続く中、羽柴方は「家康の拠点の一つである岡崎城を攻めれば、小牧山の徳川軍は崩れる」と「三河中入り作戦」を画策、池田恒興を先頭に岡崎に向け進軍を開始した。そのルート上にあったのが、この城だ。岩崎城の兵たちは池田軍を阻止すべく攻撃を加えたが、全滅。城は落城した。

模擬天守にばかり目が向くが、注目すべきは曲輪、土塁、堀などの遺構である。現地を訪れ、本質的な城の価値を体感して欲しい。



所 日進市岩崎町市場67
0561-73-8825 (岩崎城歴史記念館)
営 9:00～17:00 (入館は16:30まで)
休 月曜日(祝日の場合は開館) 12月28日～1月4日



所 長久手市武蔵塚204
0561-56-0627 (長久手市くらし文化部生涯学習課)

古戦場公園

長久手市

池田恒興・元助親子の塚(国史跡)がある公園

「岩崎城の戦い」では勝利をおさめた池田恒興だったが、「長久手の戦い」の主戦場であるこの地で息子・元助と共に討死した。親子が亡くなったとされる場所にはそれぞれ「勝入塚」と「庄九郎塚」がたつ。「長久手合戦図屏風」(元模写)(原本は徳川美術館蔵)などを展示し、合戦時の史跡地の距離感や臨場感を体感できる長久手古戦場記念館が令和八年(二〇二六)四月オープン予定。
※古戦場公園は現在再整備事業を行っています。郷土資料室は令和七年十一月まで閉館予定。

東海道筋に並んだ

全国屈指の規模の近世城郭

文・写真 加藤 理文（日本城郭協会理事）

江戸時代、尾張・三河両国には藩主が居城を持つことを認められていた城が、九城存在していた。しかし、明治維新後の廃城令や都市化の波によって、多くが失われ、現存する天守は犬山城のみとなり、櫓や城門も名古屋城に残るだけとなったしまった。

「尾張名古屋は城で持つ」と言われた県だけに、古くから城への関心も高く、昭和二十九年（一九五四）の産業文化大博覧会開催にあわせて、吉田城鉄櫓が模擬復元された。続いて、同三十三年に田原城二の丸隅櫓が模擬復元、翌三十四年には戦災で焼失した名古屋城大小天守が外観復元され、同年に岡崎城天守も復興された。平成五年（一九九三）岡崎公園の入口に模擬の大手門が、翌六年に田原城の桜門がいずれもRC造りで建てられている。

平成八年になると、西尾城において本丸丑寅櫓と鎗石門が県内初の木造で再建。木造再建は本物志向の波に乗って広がり、同二十二年には岡崎城二の丸東隅櫓が、同二十一年より足掛け九年

の歳月を経て、同三十年に戦災で焼失した名古屋城本丸御殿が完成を見ている。御殿の完全復元は、我が国初の試みであった。令和二年（二〇二〇）になると西尾城の二の丸丑寅櫓と土塀が復元。そして、全国からも非常に注目を集める名古屋城大小天守の木造再建が控えている。ここでは、別稿に詳しい名古屋城と犬山城以外の復元された近世城郭について紹介したい。

徳川家康生誕の地として名高い岡崎城は、東西約一・五キロメートル、南北約一キロメートルと往時は広大な規模を誇っていた。外堀として利用していた菅生川には船着場が設けられ「五万石でも岡崎様はお城下まで船が着く」と江戸小唄にその繁栄が謳われる程であった。一般的に外様大名の大大城郭でさえ〇・五キロメートル四方程の規模が普通だった世に、実にその五倍程の規模を持つ城だったのである。岡崎城以上の規模を持つ城は、江戸城・姫路城・熊本城くらいではない。この城をこまで大きくしたのは、豊臣秀吉配下の田



田原城二の丸隅櫓

吉田城鉄櫓下石垣

吉田城鉄櫓

中吉政で、南を流れる菅生川を利用しその東・北・西の外周に、田中堀と後に呼ばれる惣構の堀と土塁を築き上げると共に、本格的な城下町整備を実施した。吉政は、東海道を城下町の中心を通るように引き入れ、城の守りを固めるために「岡崎の二十七曲がり」と呼ばれる鉤の手状の道に整備し、併せて天守以外の二重櫓を十七棟も建てている。五万石の譜代大名の城には、二重櫓は二・三基というのが標準であったことから、岡崎城の異常な規模が判明しよう。

この岡崎城と並んで巨大な城だったのが十五万石を領した池田輝政の居城・吉田城だ。外堀に囲まれた範囲は、東西一四キロメートル、南北約〇・七キロメートルもあり、岡崎城に次ぐ規模を誇っていた。近年、本丸を中心に発掘調査が実施され、かつての姿が判明してきた。中でも、本丸北西隅の鉄櫓台の石垣は、池田時代に築かれたことが確実な石垣で、その高さは約十二・七メートルで、織豊時代の石垣としては東海地方屈指の高さを誇っている。また、南多門

の石垣も高さも約十二・六メートルであった。城は豊川に面しているため、川手櫓と呼ばれる櫓があり、船で城内に入るための水門の石垣も残る。また市街地の城で、これ程良好な形で土塁が残されているのも珍しい。高さ約四メートルで、土塁上には、土塀の基礎となる石材等も一部に残り、これまた貴重な遺構となっている。

西尾城は、平成八年（一九九六）に、本丸丑寅三重櫓、二の丸鎗石門が木造で復元され、同二十六年には将来的な天守再建を考慮し、天守台が築き直された。次いで、令和二年（二〇二〇）、二の丸丑寅櫓と土塀も木造復元された。この土塀は二ヶ所で屏風折れを持つ特異な塀で、復元事例は非常に珍しい。屏風折れの土塀は、横矢を懸けるためと言われるが、折れを持たせることで強度を増すねらいを併せ持っていたと考えられる。愛知県の城と言えば、犬山城・名古屋城が目が行きがちだが、実は全国でも十指に入る巨大な岡崎城・吉田城が江戸期を通じ存在し続けたのである。

Data

岡崎城（→P16）

別名：龍城
文化財史跡区分：市指定史跡（埋蔵文化財）

吉田城（→P16）

別名：今橋城
文化財史跡区分：市指定史跡

西尾城（→P15）

別名：鶴城
文化財史跡区分：市指定史跡



西尾城土塀



西尾城二の丸丑寅櫓



岡崎城青海堀



岡崎城天守

まだまだあるぞ 愛知の名城

数多くの城が残る愛知には、
時の変遷とともにわずかな遺構しかないもの、
さらに石碑だけのものも含まれる。
これらの城は「何もない」と思われがちだが、
どの城も尾張・三河の戦国史を彩った
重要な舞台である。

那古野城 名古屋市中区二の丸1 (名古屋城二の丸)

現在の名古屋城二の丸付近にあった城。一五三八年頃、織田信長の父・信秀が今川氏から奪い取った。信秀が古渡城へ移り、信長が城主となった。



名古屋市中区二の丸1 (名古屋城二の丸)

蟹江城 蟹江町

一五八四年、羽柴軍と織田・徳川連合軍のあいだで起こった「蟹江合戦」の舞台となった城。この合戦と翌年におきた大地震で城は壊滅した。



海部郡蟹江町城一丁目109

大野城 常滑市

浅井三姉妹の末妹・お江の方(徳川二代将軍・秀忠の正室)が最初に嫁いだことも知られる佐治氏の山城。城山公園には城型の展望台がたつ。



常滑市金山市城山地区内

大草城 知多市

織田信長の弟・織田長益(有楽斎)が築城をはじめたが、未完のまま終わった。本丸と二の丸の周囲にある土塁や堀の大部分は、ほぼ完全な形で残る。



知多市大草字東屋敷110-1

龍泉寺城 名古屋市

一五五六年、織田信長の弟・信勝が築城。翌年、信勝が信長に殺されたことにより廃城に。一五八四年「小牧・長久手の戦い」では、羽柴秀吉がここに陣を構えた。



名古屋市守山区竜泉寺1-1-902

守山城 名古屋市

一五三五年、尾張攻略を進めていた徳川家康の祖父・松平清康が家臣に殺害された「守山崩れ」の舞台となった城。一五六〇年「桶狭間の戦い」以降に廃城となる。



名古屋市守山区市場4-22

羽黒城 犬山市

一五八二年「本能寺の変」後、廃城となっていたが「小牧・長久手の戦い」の時、羽柴秀吉が城を修復させ、山内一豊らに守らせた。土塁と堀の一部が残る。



犬山市羽黒字城屋敷31他

坂部城 阿久比町

徳川家康の生母・於大の方が坂部城主・久松俊勝と再婚し、十五年間暮らした。一五七七年に織田信長の家臣・佐久間信盛の手勢により攻められ落城。焼失した。



阿久比町大字卯坂字栗之木谷32-1

緒川城 東浦町

十五世紀後半の築城と伝わる。四代緒川城主・水野忠政の娘として、この城で生まれたのが徳川家康の生母・於大の方。現在は土塁の一部が残る。



知多郡東浦町緒川古城

山中城 岡崎市

県内最大級の規模を誇る山城。諸説あるが、西郷氏または岡崎松平家により城の基礎がつくられたとされる。土塁、堀切、堅堀などの遺構が残る。



岡崎市舞木町字城山1-42

大草城 長久手市

十六世紀後半、森長可により大規模な改修がなされたと伝わっている。長可は「小牧・長久手の戦い」では秀吉方の武將で、戦死後に廃城したとされる。



長久手市杵ノ洞

小口城 大口町

一四五九年、岩倉織田氏の織田広近が築城。織田信長の攻略により一旦、廃城となったが「小牧・長久手の戦い」では羽柴秀吉方の前戦基地として再び使用された。



丹羽郡大口町城屋敷一丁目261

大野城 愛西市

一五八四年、蟹江城の支城として築城。同年、羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康が戦った「小牧・長久手の戦い」の前哨戦である「蟹江合戦」では戦いの舞台となった。



愛西市大野町郷前218

刈谷城 刈谷市

一五三三年に徳川家康の生母・於大の方の父親である水野忠政が築城したとされる。一部が亀城公園となっており、石垣や隅櫓の復元を目指している。



刈谷市城町一丁目1-1

挙母城 豊田市

童子山に築かれ、三河・尾張・美濃・信濃・伊賀・伊勢・近江の七つの国が望めることから七州城とも。城跡公園には櫓台の石垣が残り、隅櫓も復元されている。



豊田市小坂本町8-22

真弓山城 豊田市

発掘調査などに基づき全国で初めて整備された戦国の山城。高櫓・長屋・物見矢倉・厨(くりや)などの建物が復元されている。眼下には足助の町並みが広がる。



豊田市足助町須沢39-2

松平城 まつだいら **豊田市**

徳川家康の先祖・松平親氏の築城とされる。曲輪、竪堀、堀切などのほか、山腹には約四百メートルの空堀が残る。松平氏館跡、大給城等と共に国史跡に指定された。



豊田市松平町三斗蒔15

市場城 いちば **豊田市**

室町から安土桃山時代にかけて、この地をおさめた鱷氏四代の居城跡。規模は地区最大。山頂にある石垣は、一五八三年に鱷重愛によって改修されたもの。



豊田市市場町城

古瀬間城 こせま **豊田市**

一五〇六年、徳川の祖である松平氏が築城したとされる。標高百メートルの小高い丘に築かれた山城であり、頂上の本丸のほか、二の郭、腰郭などが残る。



豊田市志賀町城山521

伊奈城 いな **豊川市**

十五世紀中頃に本多氏によって築城され、約一五〇年間、伊奈本多家の居城となった。土塁の一部が残るほか、本丸には物見櫓が復元されている。



豊川市伊奈町柳38

上ノ郷城 かみのごう **蒲都市**

一五六〇年「桶狭間の戦い」後、「三河統一」へ向けて動き出した徳川家康が忍者を使い、落とした城としても知られる。曲輪、空堀、巨大な土塁が今もよく残る。



蒲都市神ノ郷町

亀山城 かめやま **新城市**

一四二四年、奥平貞俊が築城した平山城。貞俊の子孫は一五七五年「長篠・設楽原の戦い」で活躍した。長篠城主・奥平貞昌（信昌）、土塁、空堀などが残る。



新城市中手清岳字城山

安城城 あんじょう **安城市**

一五四〇〜四十九年には、織田信長の父・信秀と徳川家康の父・松平広忠がこの城を奪い合った。本丸跡に大乘寺、二の丸跡に八幡社がある。



安城市安城町赤塚1

本證寺境内 ほんしやうじ **安城市**

一五六三〜六十四年に徳川家康と一向宗との間でおきた「三河一向一揆」の中心寺院の一つ。防御施設があることから、城郭寺院とも呼ばれる。現在も堀や土塁が残る。



安城市野寺町野寺26

知立城 ちりゅうじょう **知立市**

一五六〇年「桶狭間の戦い」では合戦直前、今川義元が本陣を置いたとも伝わる。義元が織田信長に討たれると、その後、織田軍に攻められ落城したという。



知立市西町西10

文殊山城 もんじゅやま **新城市**

亀山城主・奥平氏の城。武田氏との和睦の証として塞之山城と共に築かれる予定だったが、築城が遅れたため武田氏に催促され一夜にして築いたとも伝わる。



新城市中手清岳コンホウソレ

塞之山城 さいのかみ **新城市**

諸説あるが、文殊山城と同時期の築城とも伝わる山城。土塁、堀切、竪堀などが残る。現在、尾根伝いに道が整備されており、文殊山城との行き来も可能。



新城市中手清岳字本城

宇利城 うり **新城市**

十五世紀後半に築城された山城。一五二九年には「三河統一」を目指す徳川家康の祖父・松平清康によって攻め落とされている。土塁、堀、石積みなどが残る。



新城市中宇利字仁田36

福谷城 うきが **みよし市**

三河と尾張の国境に築かれた城。徳川四天王の一人・酒井忠次も城主をつとめ、十六世紀中頃、柴田勝家に攻められたとの記録も。空堀や土塁が比較的よく残る。



みよし市福谷町市場64-5

二連木城 にれんぎ **豊橋市**

一四九三年に田原城主・戸田宗光によって築城された。一五九〇年、廃城。現在、大口公園となっている部分が本丸および二の丸であり、周辺には空堀と土塁の部が残る。



豊橋市二連木町

岩略寺城 がんりやくじ **豊川市**

標高一七四メートルの御城山に築かれた東西三河の境目の城。十五世紀中頃に築城されたと伝わる。曲輪、虎口、土塁、井戸、堀切などの遺構が完全に近い状態で残る。



豊川市長沢町御城山

野田城 のだ **新城市**

一五二六年、今川方に属していた菅沼定則が築城。一五六〇年には徳川方の城となったが、その後、今川氏や武田氏から幾度となく激しい攻撃を受けた。



新城市豊島字本城

柿本城 かきもと **新城市**

標高一九〇メートルの子路山山頂付近にある山城。二五八八年、井伊家を支えた井伊谷三人衆のひとり・鈴木重勝が築城したとされる。主郭と腰曲輪が残る。



新城市下吉田字柿本地内

津具城 つぐ **設楽町**

十六世紀後半に築かれた山城。土塁、堀切、竪堀、横堀、切岸などが残る。一五六九年、徳川家康に属した名倉寺脇城の奥平信光の攻撃を受け、落城した。



北設楽郡設楽町津具字麓

各城で
話題沸騰!

思わず集めなくなる 「御城印」

全国のお城や観光案内所などで発行されている御城印が人気を集めている。城の名が揮毫され、「入城記念符」「城郭符」などと呼ばれる場合もある。城を訪れた記念のコレクションとして集めるファンが多い。天守を持つ城だけでなく、知る人ぞ知る中世の山城でも発行されたり、季節限定版や武将エピソードを盛り込んだりするなど工夫を凝らして毎月のように新しい御城印が増加。まさに現在進行形でブームが拡大中だ。愛知の各城でも日々新しく御城印が発行されている。建造物など遺構の少ない城では近隣の資料館や道の駅で販売されているので訪問の際にチェックを忘れずに。

名古屋城(*)

右の字：特別史蹟
中央の字：名古屋城
家紋：徳川家「三葉葵」



犬山城*

家紋：徳川家「三葉葵」、織田家「織田木瓜」、成瀬家「丸に酢漿草(片喰)」、豊臣家「五七桐」



小牧山城*

家紋：織田家「織田木瓜」



岡崎城*

家紋：徳川家「三葉葵」



古宮城

家紋：武田家「武田菱」



長篠城

家紋：奥平家「奥平軍配団扇」、菅沼家「三つ釘抜き」



吉田城*

家紋：池田家「丸に揚羽蝶(通常版)」



監修者・執筆者紹介



監修・文
中井 均 (滋賀県立大学名誉教授)

一九五五年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。日本城郭協会評議員。主な著書に「織田・豊臣城郭の構造と展開上」、「中世城館の実像」、「信長と家臣団の城」ほか多数。



監修・文
加藤 理文 (日本城郭協会理事)

静岡県生まれ。文学博士。主な著書に「織田信長の城」「知る・見る・歩く! 江戸城」「よくわかる日本の城 日本城郭検定公式参考書」「戦国の山城を極める 厳選22城」など多数。



文
小和田 哲男 (日本城郭協会理事長)

一九四四年静岡県生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。現在、静岡大学名誉教授、文学博士。戦国時代史を専門とし、主著に「戦国の城」「中世城郭史の研究」など。



文
萩原 さちこ (城郭ライター)

執筆業のほか、講演やメディア出演など幅広く活動。著書に「お城へ行こう!」(岩波ジュニア新書)、「城の科学」(講談社ブルーバックス)ほか。連載も多数。 <https://46meg.com/>



文
クリス グレン (お城好きラジオDJ)

オーストラリア生まれ、名古屋在住。二〇一三年、日本城郭協会理事に就任した。著書に「豪州人歴史愛好家、名城を行く」、英文執筆に「城バイリンガルガイド」などがある。



お城観光ガイドブック

百花城乱

いざ、城愛の国あいちへ

2025年7月改訂

〈発行〉
あいちの歴史観光推進協議会

〈参考文献〉

愛知中世城郭研究会・中井均(編)『愛知の山城ベスト50を歩く』/サンライズ出版
中井均・鈴木正貴・竹田憲治(編)『東海の名城を歩く 愛知・三重編』/吉川弘文館
小和田哲男(著)『東海の戦国史 天下人を輩出した流通経済の要衝』/ミネルヴァ書房
柴裕之(著)『徳川家康 境界の領主から天下人へ』/平凡社
橋場日月(著)『新説桶狭間合戦 知られざる織田・今川七〇年戦争の実相』/学研新書
歴史街道2010年6月号「桶狭間の謎」/PHP研究所
歴史群像シリーズ50「戦国合戦大全」/学研
名古屋博物館 平成19年度企画展図録「城からのぞむ 尾張の戦国時代」/名古屋博物館
長久手市郷土資料室 平成29年度特別展図録「小牧・長久手の戦い〜戦国を駆け抜けた者たちここ長久手。〜」/長久手市

* 通常版の他、数量限定版の頒布も行われます。

※上記は、愛知県の日本100名城、続日本100名城の御城印です。P4のリストにあるように県内の各城でも御城印が発行されています。